

対

テニスに萌え★

元プロテニスプレーヤー

伊達 公子

1970年(昭和45年)京都市生まれ。小学校1年生からテニスを始める。園田学園高校3年時にインターハイでシングル・ダブルス・団体で3冠獲得。卒業と同時にプロテニスプレーヤーに転向。1995年世界ランキング4位、フェド杯では世界1位グラフを撃破、ウィンブルドンでもベスト4になるなど数々の快挙。1996年引退。1998年より子どものテニス教室「キッズテニス」を全国で展開。活動は海外にも広がり、政府開発援助ODAでバンラデシュ・タイなどの開発途上国を訪問して子どもにテニスの楽しさを教える。文部科学省委員会(「政策評価に関する有識者会議」「スポーツ振興投票特別委員会」)の委員を務める。

「自分で選んだ学校だからこそ 頑張ることができました」

野口：この対談場所は、伊達さんが高校時代の3年間を過ごされた「園田学園」です。自分自身のことを言うのは気はすかしい思いでしょうか、伊達さんはどんな生徒でしたか。

伊達：「どんな生徒だったか」と問われますと、「テニスに明け暮れる生徒だった」ということが真っ先に浮かんできます。私がそこまでテニスに打ち込めることができたのも、テニスをする環境が学校に整っていたからです。クラスの友達、テニス部の先輩・後輩、そして学校当局を含めて周りの多くの人たちが、私がテニスをすることを理解し、支えてくださったからです。そのため、テニスに没頭することができ、極端に言えば、テニスのことだけを考える生徒であったのかなと今にして強く思います。

野口：伊達さんは、小学1年の6歳からテニスを始められ、高校に入る前の中学生までは民間のテニスクラブに通われたそうですが、民間のクラブと学校の部活とに違いがあるとすればそれは何でしょうか。

談



園田学園中・高等学校校長

野口 克海

1942年(昭和17年)大阪市生まれ。中学校教諭から大阪府教育委員会指導主事・指導課長・義務教育課長。平成8年堺市教育委員会教育長、平成10年大阪府教育委員会理事兼大阪府教育センター所長を歴任。現在、大阪教育大学経営協議会委員・守口市教育委員長。平成13年園田学園女子大学教授、平成18年から中学・高等学校の校長を兼務。その間、文部省(現 文部科学省)教育課程審議会委員。「子ども中心の社会こそが国の将来を切り開く」ことを実現するため「子ども教育広場」を開設しその代表者。講演や執筆にエネルギーに活躍中。著書は『ボトムアップの教育改革』(三晃書房)など多数。

伊達：小学生・中学生まではずっと民間のテニスクラブでしたが、アットホームな雰囲気であったり、また、中学生のときでも、ある程度自主性に任せてやらせてもらえるクラブでした。高校の部活では、すぐ身近にライバルがたくさんいるという環境です。最初は戸惑いもあったのですが、ライバルの存在が自分自身の目標意識を目覚めさせてくれ、結果的には大きな力になりましたね。それが私にとって大きな違いでした。

野口：高校に入るまでは、割合自由に楽しく伸び伸びとテニスをしていました。

伊達：そうですね。伸び伸びとテニスをしていました。

野口：それが高校では、伝統のある部活で周りを見渡すとライバルやすごい先輩がいっぱいいる。怖い監督もいる(笑)。そういうところでちょっとカルチャーショックというか戸惑いや違和感を感じながら高校生活がスタートしたのですね。

伊達：最初は、「あれ？自分が描いていたのとはちょっと違う」と思いました。親はテニスに関しては自由にさせてくれましたが、それ以外は厳しく、察に入って自由になりたいと思っていたのですが、実際には自由気ままな生活ができるわけではありません。そしてコートでは、同じ高校生のライバルや大学生、週末になると卒業生の先輩も混じって厳しく激しい練習。先輩・後輩の上下関係。練習時間も長く、自分の意志とは無関係にやらされるという感

テニスに萌え★テニスに燃える

じに当時は反発を覚えました。毎日の長距離のランニングも苦痛でしたね。そして怖い監督という存在(笑い)。

野口：そのような中ですが、テニスを頑張り、なぜやり通すことができたのでしょうか。

伊達：まず私が乗り越えることができたのは、この学校を自分自身で選んだことだと思います。全国有数のテニスの名門校であるこの学校に、自分の意思で本当に行きたいのだと。自分で選んだ学校で、自分でテニスをするためにこの学校に入学したからには、自分自身に絶対に負けたくなかった。自分に負けないためにも自分で決めたことはやり遂げようという気持ちがあります。

野口：それって何事についても大事ですよ。イヤイヤ来たとか、だれかに決めてもらって来るのとは大きく違いますよね。

「勝たんでええ。テニスを 伸び伸びと楽しんでこい」

伊達：それと当時の名物監督の光國先生の存在がありました。厳しさの中にも愛情といいましか生徒への優しさをすごく感じました。「寮生活をしてると野菜不足になるやろ」と、畑でとれた野菜を差し入れするなど部員のテニスを強くするという以前に、大切な生徒を預かっているのだという気持ちがすごく伝わってきました。練習がいくら厳しくても、「あっ、ついで行きたい」と思える監督でした。

野口：光國先生もそうですが、どの学校でも部活動の顧問をしている多くの先生は、土曜日も日曜日も返上して、自分の家族のことをほったらかして、生徒のことで一生懸命頑張ってる下さっていますね。テニスでは、光國先生はどのような指導者でしたか。

伊達：高校1年生の時、インターハイの県予選で負けましたが、高校に入った時は、私はそれほど強くはありませんでした。しかし、このころから、負けたときは「次こそは勝ちたい！」という気持ちを強く持つようになってきました。高校1年の時から光國先生には、「伊達は勝たんでええ」「高校ではダメでもええ」といつも言われていました。その当時は監督がどういう意味で言っているのか理解ができなかったのです。当時、全国高校選抜大会で6連勝中でも「伊達は勝たんでええ」という口癖。園田学園のテニス部の監督なわけですから、本来なら試合に勝つことを第一に考え、そのためのメッセージを伝えると思うのです。それが「伊達は勝たんでええ」ですから…。先生は、私の高校3年間よりもその先の私の歩みを見て下さっていたのではないのでしょうか。今勝たなくても伊達は将来もっと伸びると見抜き、確信されていたからこそ「勝たんでええ」という言葉が出ていたと思うのです。試合ですから、勝敗の結果を最優先するのは当然です。勝敗の結果が学校の名誉や伝統にも及びます。私の将来を含めてさまざまなことを想定して、しかもその想定は必ずしもその通りに実るとは限りませんし、全くの未知数です。将来どのような結果になろうとも、その責任を厳粛に受けとめるという覚悟が先生におありになったのだらうなと思います。

野口：「勝たんでええ。とにかく伸び伸びと楽しんでこい」と光國監督から後押しされた伊達さん。高校1年生の時にはそれほど目立つ選手ではなかったのですが、高校3年のときにはインターハイでシングル・ダブルス・団体で3冠に輝き、日本一になられたのですよね。

伊達：ポイントがかかった団体戦でも、先生が「試合の結果を考えるな、とにかく自分のテニスをやってこい」といつも後押しをして下さいました。多くの部員が練習をしているときも、それぞれの部員の個性を見抜いた言葉の投げかけがありましたね。

野口：なるほど。

伊達：監督が何か言われたとき「いや、そうではないと思います」と私なりに自己主張をしたときもたくさんあります。

野口：監督にそういうことが言えたわけだ。

伊達：そのため、よく言われました。「私に文句を言ったのは、今までお前と〇〇と△△…」だと。歴代のテニス部員の名前を出して楽しむように笑いながらですが、逆らった部員を認めて下さったのかなと懐かしく思い出します。

野口：テニスに全力で取り組むことができたのは、環境や光國先生などの周囲の人の支えがあったことがよく分かりました。その土台になったのは、小学生や中学生の時に、民間のテニスクラブで「自由に楽しくやってテニスが好きになった」ということがあったのでしょう。

伊達：最初にテニスを始めたテニスクラブは、とにかく小さいこぢんまりとしたコート2面ののほほんとしたクラブです。そのクラブを経営するご夫婦の「おばちゃん」にテニスすることの楽しさを教えてもらいました。中学生での民間のテニスクラブでは、自分のテニスができあがっていない中で、新しい技術や攻撃的なテニスをコーチの方から教えていただきました。このクラブではライバルにも恵まれ、テニスへのモチベーションを上げることができました。そしてチームワークの大切さや勝つことの喜びを学びました。それぞれの段階で、私のテニス人生に欠かせないものを経験することができたと思うのです。テニスにしてもそうでし、野球や他のスポーツにしても多分そうだと思いますが、才能を持っている子どもを上手に育てていくためには、その時期時期に適切な場や指導者が必要なのでしょうね。

野口：最近、あるテニスクラブが私の学校の生徒に「学校へ行かないで単位制高校か通信制高校にして、朝から晩までテニス漬けの生活をしたら」と言って勧誘したことがありますが、今までのお話を聞きますと、学校の部活動もそれなりに意味がありますよね。



全日本ジュニア選手権で優勝(高校3年)

テニスに萌え★テニスに燃える

伊達：すごく大きい意味があると思います。1つには、学校でのテニス部以外の友人も大きな力の源になっていました。授業が終わると直ぐにテニスコートへ走っていくような日々でしたので、学校で友人と過ごす時間は支えになっていたのです。私は、あのまま民間のテニスクラブだけで育っていると、ここまでは来ることができなかったと思います。2つには、すでに言いましたが中学校・高校・大学が1つの学園の中にあるため、ここでは大学生という自分よりもさらに体格も大きいし、力もあるし、経験もある強い先輩がいつも身近にいました。高校生でいくらナンバーワンになっても、まだ勝てない相手がいるということを日常的に意識して練習することは、精神的にも強くなりすごく大きなメリットだと思いますね。

最近クラブスポーツのよさがもてはやされ、部活の旗色が悪いことは確かです。部活では、学校の先生は多くの時間やお金を犠牲にし、情熱を傾けて指導されていることはあまり知られていません。スポーツをする環境は欧州のようなクラブスポーツが理想だと思いますが、日本の場合、部活には、教育活動の大きな一端を担っていると思います。



張りつめた神経

「テニスに勝つために空気を吸う！」

野口：高校を卒業されて、世界を舞台にしてプロテニス選手として第1歩を踏み出されました。その後は、当時世界ランキング1位のグラフに念願の初勝利したり、ウィンブルドンでベスト4になるなど、世界のトッププレーヤーに登りつめられる大変な活躍です。プロテニス生活で何が一番大変でしたか。

伊達：8年間の選手生活でしたが、プロになって直ぐに海外ツアーの生活に入りました。このツアー生活は、1年で約250日近く世界を転々として試合をします。そのため、言葉と食事は最後までつらかったですね。海外ツアー生活では、自己管理をして体調面を整えることが大切ですが、その中心が食事です。もともと私は和食党ですし、試合前は決まって白い御飯を食べますので、日本食レストランを探したり食材を持ち込むなど結構苦労をします。その他、練習相手を探したり練習コートを確認すること、また飛行機の予約をすることなど全部自分でしなければなりません。「プロというのは、コートに立って試合をするだけではないんだ！」と実感したのでした。それに慣れるのにずいぶん時間がかかりましたね。で、結局、最後までツアー生活自体を楽しむまでには至りませんでした。また、テニスは、シーズンオフがすごく短い競技です。12月の末からシーズンがスタートし、次の年の11月の中旬ぐらいまでシーズンが続きます。ですから、1ヶ月ちょっとの時間が完全なシーズンオフで、その期間中に、次の1年間闘えるだけのスタミナをつくり直し、けがをしない体をつくるとなると、必然的に休みがなくなってしまいます。

野口：厳しい自己管理はもちろん、究極の技を追求するプロの世界。何事も中途半端はできないですよ。

伊達：できないですね。何と表現したらいいのでしょうか「あっ、空気はテニスを勝つために吸っている！」と思うぐらいに張りつめ、神経質にもなっているといっても過言ではないでしょうね。

野口：なるほど、すごいなあ！



伊達：自制心というのは、すごくありましたね。勝つためであれば、それをしないという意志の強さは、すごくありました。

野口：例えば食事にしても、体調管理のためには好きとか嫌いとかのレベルを超えていると。

伊達：はい、そうですね。もう食べなければいけないから食べる。おいしいとかおいしくないのレベルではありません。

野口：テニスのために空気を吸ってる。そんな感じの毎日だったのですね。

伊達：そうです。ところで、ここ10年で大きく変わって私たちは海外にあまり距離を感じなくなってきました。経便から直行便になるなど飛行機の便もよくなり、また、インターネットが普及し、いつでも即時に日本の情報に触れることができるようになりました。世界の距離が縮まったということでしょうか。私がツアーを回り始めたころは、もちろんインターネットは普及しておらず、出国してしまうと慣れ親

しんだ言葉や日本の情報が閉ざされ、外国語もろくにできない状況の中で、体格が決して大きいほうではない私が、大きい人たちの中でもまれるのですから、最初は正直不安でした。

野口：その伊達さんが、「やったー！」とプロで一番うれしかったのは何ですか。

伊達：難しいですね…。トップテンに入ったときはうれしかったですね。ランキング表は1,000番ぐらゐまであります。最初の頃は、ランキング表を何枚もめくって「JAPAN」の文字を一生懸命探して、自分の名前を探し出しますが、トップテンに入ると、ランキング表の1枚目の一番上に名前が載るので、探す必要もなくなります。その時というのは、精神的にも一番充実していた時期だと思います。印象深い試合はと問われますと、やはりウィンブルドンのセンターコートで闘った試合です。負けはしましたが、相手は当時ナンバーワンのグラフです。2日間にわたって闘った試合でしたが、ウィンブルドンのセンターコートは、私にとって憧れの場所でもあり、またそこで一番勝ちたいと思った大会でもありました。

野口：テニスの発祥の地イギリスのウィンブルドンのセンターコートは、「テニスの聖地」ですからね。

伊達：やはり選手だれもが憧れる場所です。センターコートは1年のうちで2週間の大会期間中しか使いません。そこでは、練習も一切することはできません。本当に限られた人しかセンターコートに入ることが許されません。シード選手と当たってセンターコートに入るのではなくて、勝ち上がってセンターコートに入るというのが自分の目標でもあったのです。そのため、グラフとの試合が実現できたのは、非常に印象深いものでした。

🎾「スポーツ文化」を社会に根付かせる

野口：プロテニス引退された現在、「スポーツの楽しさを伝えられれば」ということで3歳から10歳までの子どもを対象にキッズテニスを我が国で最初に立ち上げられました。私がすごいなと思ったのは、スポンサーから呼びかけられたのではなく、伊達さんの考えで設立されたことです。何が伊達さんを「キッズテニス」設立に突き動かしたのですか。

対談

テニスに萌え★テニスに燃える

伊達：私は、ヨーロッパ諸国やアメリカなどのいろいろな国を訪れましたが、その時は自分自身が選手でしたので、相手とどう闘っていくかという試合のことばかりを考えた生活でした。しかし当時から、日本のスポーツと欧米のスポーツとに違いがあり、なにかしら違和感を感じていました。引退してから、「あっ、自分が感じていた違和感はこういうことなのか」と考える余裕が出てきました。

違いの1つは、日本のスポーツはするスポーツで、観るスポーツではないということだ



—「キッズテニス」(伊達公子著 岩波書店) から抜粋—

現役を引退したある日、テニス雑誌を眺めていたら、1枚の写真に目が吸い寄せられてしまいました。子どもがテニスラケットを持って楽しそうにしている写真が掲載されていたのです。私が6歳でラケットを持って遊んでいた頃の記憶とダブリました。振り返ってみると、私がテニスを始めたそもそものきっかけは、幼い頃、両親が通い始めたテニスクラブについていったことでした。ボールで遊んだり、ラケットを振り回したりしているうちに、テニスは楽しい!と思うようになっていったのでした。今の子どもたちにも、私が幼い頃に体験したようなことを体験してもらいたいと、そのとき思ったのです。

こうして98年3月に「カモン! キッズテニス」はスタートしました。当時は、「キッズテニス」なんて、名前も存在も世間では全く認知されていませんでしたから、何もかも手探りの状態でのスタートでした。キッズテニス用の道具もそうです。キッズテニスで使う主な道具は、軽いラケットとスポンジのような柔らかいボール、そして低いネットです。当時は、テニス用品の各メーカーもキッズ用の商品は国内ではほとんど販売していませんでした。スポーツメーカー色を出したくなかったので、全社に協力をお願いして、今日ではいろいろなタイプのラケットとコートがある状態にしました。



ね。例えばテニスでは、テニス人口は多いのですが、どんなに大きなトーナメントをしていても、試合を観に来る人の数は一気に減りますね。スポーツを観るという習慣が定着していないのではないのでしょうか。また、日の丸を背負った競技では、応援しようという意識は急に高まるようですが、そうではないときは、観るスポーツではないという傾向が強いのかなあという気がしています。

野口：欧米では、スポーツのすそ野がもっと広く、みんなで楽しんでいるということですか。

伊達：そうですね。すそ野も広がっていますし、やることも好きだし、観ることも好き。スポーツをしなくても、スポーツ施設に行くという感覚があるようです。例えば欧米の民間スポーツクラブに行くと、ご年配の方たちがジャケットを着て、スポーツはやらなくても話をしに来る。スポーツの話題に触れたいから、その場所に足を運ぶ。そこでチェスをやりながら、テレビでスポーツの番組を見て、スポーツ談義をしているという光景をよく見かけますね。

野口：なるほど、日本にはちょっと見かけないですね。

伊達：そうですね。スポーツをする場所がコミュニティーの場所になっていて人々が集っています。コミュニティーの場所になっているという感覚は、我が国とは相当違います。例えば、市営とか県営のグラウンドやテニスコートってたくさんあると思いますが、そこに人々が集うという視点での施設は、非常に少ないという気がします。

野口：スポーツの総合施設そのものが生活の中に入り込んでいる、溶け込んでいるような環境というのは、日本にはまだありませんね。

伊達：そうですね。アメリカでは、大学のコートを使用していないときは、その地域の人たちに無料で開放していますね。日本の大学でも、地域の人たちへの開放ができつつあると思いますが、まだまだアメリカなんかと比べると遅れていますね。

野口：欧米では、スポーツが生活や地域の中の文化になって、しっかりととけこんでいるのですね。

伊達：そこだと思いますね。地域と競技団体や行政が連携し、スポーツが文化として生活の中に根付いている「スポーツ文化」でありたいと思います。

野口：スポーツというと、直ぐにどう上手になるかとか、どう試合に勝つかということが強調されます。そのためか、学校の体育では、苦手な生徒はいよいよ授業を受けます。そうではなく、小さい時から、上手ではなくても「スポーツは楽しいものだ！」ということを経験することですよね。そうすれば、年とってからでも夫婦と一緒にテニスを楽しむことができるというものです。

伊達：それが理想の形でしょうね。それでこそスポーツが文化と呼べるのでしょね。

野口：世界を回られて、「スポーツ文化」をいろいろな視点から感じとられてきた伊達さん。その伊達さんが「キッズテニス」というところへ力を入れようと思われたのはなぜですか。

伊達：「世界のトップまでいったのになぜ子ども相手のテニスをするの？」という声をよく聞きました。私が一番やりたいと思ったことは、子どもが持っている素晴らしい可能性を、テニスを通して引き出してあげること、そしてスポーツの楽しさを伝えたいということです。ちょうど私が、両親からテニスをするチャンスを与えてもらい、そしてコーチからの確かな指導をもらったこと、それを子ども相手にすることができたらと思ったからです。

キッズテニスで教えていて、子どもは上手く打てないと「才能がない」とがっかりしてし

テニスに萌え★テニスに燃える

まうことがあるようです。親たちは、ボールを上手く打てた子が才能があって、打てない子は才能がないと判断しがちです。しかし、子どもの才能なんて、そう簡単に分かるものではありません。私が説明したことが直ぐ理解できるのも才能でしょう。しかし、打てない子どもが打てるまで頑張り続けるというのも、その子の持つ素晴らしい才能だと言えるのではないのでしょうか。



心配な「体力低下」と「心の低下」

スポーツを通じて基礎体力をつけたり、あるいはそこで培われる人間性といいますか、人間としての基本的な挨拶ができ学ぶ心を育くむことを大切にしなければいけないと思うのですが、キッズテニスを通した伊達さんの話を聞くと、教育者の心のようなものを感じますね。

伊達：いえいえ(笑)。私は勉強が好きならほうでは決してなかったのですが、自分で何か好きなもの、自分で打ち込めるものがあれば、他のことにもそれがいい方向に反映してくるようです。テニスであれ何であれ、自分の打ち込めるものを見つけることの大切さを、テニスを通して学ぶことができました。

野口：運動神経が優れていなくても、根気強くやり続けるとか、あるいは「負けないぞ」という意思の強さを含めて、子どもはいろいろな才能を持ち合わせていて、テニスを通してその才能の可能性の拡大を図りたいということですね。

最近の我が国の教育では、二言目には「学力低下」が言われています。私は、学力低下よりもそれ以上に「体力低下」や「心の低下」のほうがもっと深刻ではないかと思っています。テニスというス

① 学び感動するテニスを通した国際協力 「学ぶ意欲が、子どもの瞳から強く伝わってきます」

野口：伊達さんは、日本だけでなく諸外国にまで行ってキッズテニスを指導されているのです。子どもたちの印象はどうでしたか。

伊達：これまで、ニューヨークやパリで現地の日本人学校の子どもたちを教えたことはありましたが、日本人ではない外国の子どもたちを教えたのは中国が初めてです。今から5、6年前のことですが、外務省・国際交流基金や中国テニス協会の協力でキッズテニスを行い、中国と北京日本人学校の小学生が参加しました。両国の子どもたちは時間が経つにつれて、みんな少しずつ打ち解けてきて、最後はすごく楽しくテニスをしてくれました。言葉ではなく、テニスを通じてお互いのコミュニケーションをとることができたと思います。

中国は1人っ子政策をとっていますが、子どもたちから何かしら「必死さ」が伝わってきました。「自分が成功しなければ」という意志なのでしょうか。私の一挙手一投足を突き射るような目で見るのです。「自分を認めてほしい、自分は成功したいんだ」といったような意志の現れをすごく感じました。

中国を訪れた同じ年に、JICA(国際協力事業団)から派遣されてベトナムにも行ってきました。子どもたちはこちらが驚くほど明るく、表情豊かなところが印象的でした。それにベトナムも、中国と同じように自己をしっかりと主張する子どもが多かったですね。

野口：私も教育視察でベトナムのサウスサイゴンという貧しい町にある小学校を訪れたことがあります。小学校の数も不足しており、この小学校では午前と午後とに分かれた2部制の授業をしています。長い悲惨なベトナム戦争によって、この国にはさまざまな戦禍の爪痕が残っています。男が3割、女が7割の人口比で、働き手の多くが女性であることもその1つです。校長先生に「この小学校の教育目標は何ですか」と尋ねますと「貧しいベトナムがこれからしっかりと豊かになっていくために、国を支える、役に立つ、そういう力を持った子どもを育てたい」という言葉が瞬時に返ってきました。「自分たちの社会をよくする子どもをしっかりと育てる」という教育目標を自信を持って語る事ができる校長先生は、我が国ではどれだけいるのかなとそのとき思いました。

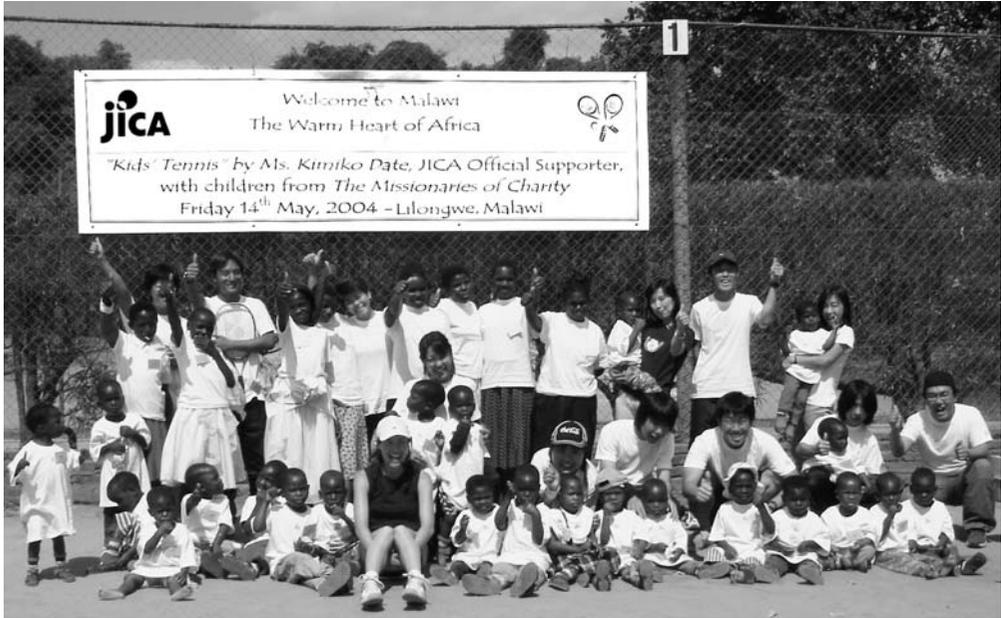
それから、子どもたちに「ベトナムが好きですか」と聞くと「はい!」という言葉が元気よく返ってきます。「ベトナムに生まれてよかったですか」と言うの間髪を入れず「はい!」という大きな返事。どの子も、貧しいけれども何か希望に燃えている。目がキラキラして、笑顔の純粋さがストレートに伝わってきます。日本の子どもに「日本が好きですか」と言うと「別に…」(笑)。何か目がトロンとしているような感じさえします。ベトナムの子どもがカーッと前を向いた姿と、「別に…」というダラッとした雰囲気との差を感じました。キッズテニスでもそのようなことを感じられますか。



伊達：ベトナムでは、とにかく子どもたちの反応がとても新鮮で、学びたいと思う気持ちがその瞳から強く伝わってきました。並びましょうと声をかけると、日本ならきれいに1列に並んでくれますが、ベトナムの子どもたちはおしあいへしあい。眼をキラキラさせながら、前にいる子を抜かしてでも「自分が打ちたい、やってみたい」と全身で表現してきます。日本で開催すると、親や社会からのプレッシャーもあるのか、みんなとても行儀がよいのです。そのかわり、楽しんでいるのかどうか、今一歩気持ちが伝わってこない。何か冷めているというのをすごく感じますね。勝っても、うれしいのかうれしくないのか、負けて悔しいのか悔しくないのかというのが、はっきり見えないですね。

野口：今では伊達さんは、日本と開発途上国の架け橋として「貧困」「教育」などの諸問題を援助しているJICAのオフィシャルサポーターに就任され、現地の子どもにテニスの楽しさを教えられているのですね。

伊達：はい、そうです。青年海外協力隊の隊員が世界各国で活躍していますが、主として、スポーツ隊員がいる開発途上国に1年に1回程度行きます。今まで、モロッコやバングラデシュ・ジャマイカ・マレーシアなどの国々を訪問しましたが、あわせて現地での日本政府が



JICAのオフィシャルサポーターとしてアフリカのマラウイ共和国でキッズテニスを指導(2004年)

展開している経済援助活動も視察いたします。行くたびに、協力隊の皆さんの活躍ぶりに感銘を受けます。JICA事業視察で見た隊員や専門家の生き生きとした姿が強く印象に残り、自分自身も学ぶことがたくさんあります。世界には、日本の協力を必要としている人たちはたくさんいることを肌で感じます。時間はかかると思いますが、日本の国際協力で1つの命が助かることによって、次の世代、また次の世代への命が繋がっていくことはすばらしいことです。

野口：開発途上国の子どもにキッズテニスを教えてみて、特に印象に残っていることがありますか。

伊達：訪問した国々の子どもたちすべてです。例えば、バングラデシュの子どもたちには最初から最後まで驚かされっぱなしでした。子どもたちの明るさ、ピュアな心、そして好奇心旺盛なこと。吸収したいという思いが子どもたちからズシッと伝わってきます。トライする気持ち、運動能力の高さは素晴らしいものでした。生まれて初めてテニスのラケットとボールに触れた子どもたちが、あっという間にラリーができるようになるのです。フォームを見て、この子は少しはやったことがあるだろうと思い、「やったことあるの?」と聞くと、「初めて!」と大きな目をキラキラさせながら答えました。こんなやりとりが何回あったことでしょう。キッズテニスが終わると「死ぬほど楽しかった! またやってみりたいけど、もうやることはないだろうな」と話す子どもたち。なんともやるせない気持ちになりました。

バングラデシュの子どもたちがテニスをする機会は、もしかしたら、もうないのかもしれませんが、でも、スポーツの楽しさを感じたこの経験を何かにつなげて欲しいと願っています。「世界中で一番貧しい」と言われているバングラデシュで暮らす子どもたちの生き生きとした目から、人間の心の豊かさを教えられた気がしました。

① 私の夢「スポーツが文化として息づく環境づくり」

野口：テニスが、伊達さんという人間を大きく育て、精神的にも鍛えていったのですね。最後になりますが、伊達さんのこれからの抱負や何かメッセージがありましたらどうぞ。

伊達：キッズテニスを通して子どもと直接触れ合って8年が経過しました。子どもたちにスポーツすることの楽しさ、体を動かすことの大切さを伝えることの喜びを私は深く感じています。と同時に、子どもにスポーツすることの楽しさを心の底から味わってほしいと願っています。そして最近では、子どもたちだけにスポーツすることの大切さを伝えるのではなく、子どもの親だったり他の多くの大人にも伝えていかなければならないことを強く意識するようになりました。

ところで、最近の子どもはひ弱になったとよく言われます。その要因はさまざまあるでしょうが、子どもへの過保護もその一因ではないでしょうか。親が子どものレールを敷きすぎてしまう。子どもは、失敗をして、転んで痛い目に遭って、そこから学んでいくというのはすごく大切だと思います。今は転ぶ前に、親が「転ぶから気をつけなさい」「転ばないようにしなさい」「こっちに来なさい」というふうに、痛みや失敗を前もって予測してできるだけ取り除こうとします。テニスでもそうですが、痛い思いをして、失敗をして、自分で泣いて、闘争心を奮い起こして学んでいくという姿勢はすごく必要だと思うのです。

自分の夢、自分の思いを子どもに託すがゆえに、レールを敷きすぎて、子どもの将来の道を決めてしまっている部分というのが強いのかなと思うのです。大人が勝手にレールを敷いて型にはめるのではなく、子どもの潜在的に持っている能力を引き出して個性を伸ばしていく姿勢でキッズテニスにおいても指導したいと思っています。

私の夢ですが、スポーツが文化として地域社会に根付く環境づくりをしたいと思っています。そのような環境の「アカデミー」をつくるのが私の夢なのです。いろいろなスポーツができる広場に、お年寄りから3歳までの人々が自由に集い、語り、交流し、そこに楽しい時間がゆっくりと流れるといいなと思います。スポーツする場、心の憩いの場、地域のつながりの場として世代が変わってもいつまでも存続し続ける環境づくりをしたいなあーと思います。

野口：すごい！3歳から100歳までが輝き続けるスポーツと文化の街づくり！スポーツ文化大臣になってもらわなあかん(笑)。そうなのです、今日の子どもの問題は大人の問題でもあるのです。大人がスポーツを愛して、その中でしっかりと文化を築いていく。今私たち大人が、どういう環境を子どもにつくって残していくのか、このことが具体的に厳しく問われているのです。今日は、長時間有意義なお話を大変ありがとうございました。

伊達：こちらこそありがとうございました。母校のますますの発展をお祈りいたします。

